

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：宇野 あかり（臨床心理学コース）

■ 研究題目
教育達成の階層差に関連する心理学的要因の検討 —時間的展望に着目して—
■ 研究代表者・分担者 氏名
宇野あかり（臨床心理学コース・博士課程前期2年）（代表者） 米田佑（教育政策科学コース・博士課程前期2年）
■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）
1. 目的 本研究の目的は中学生・高校生の時間的展望に対する階層的要因の影響を分析することである。Lewin(1951=1979)は心理的な時間の認知的側面を時間的展望と呼び、それを「ある一定の時点における個人の心理的過去、現在および未来についての見解の総体」と定義づけている。時間的展望は個人の意識や行動に大きく関わる変数であり、個人がどのような人生を送るのかという問題に大きく作用するものであるといえる。したがって、心理学領域において時間的展望は大変重要な変数として捉えられている。 時間的展望研究においては、国外において社会階層差に関する知見が多く積み重ねられており、周囲を取り巻く社会経済的な環境も個人の時間的展望の様相に大きく関わるとされる。例えば、ホームレスはその日暮らしの環境に適応するために現在志向であることや（Wallace 1986; Epel et al. 1999）、社会階層の低さが将来に対する志向性の狭まりに繋がってしまうとの指摘が多い（Cottle and Pleck 1969; O’Rand and Ellis 1974; Nrumi 1987）。このように考えると、階層的要因が生徒の時間的展望に対して影響を与える可能性は十分に考えられる。しかし、国内において時間的展望に対する階層的要因の影響を分析する研究は見当たらない。そこで、本研究では国内の中学生・高校生を対象に時間的展望に対する階層的要因の影響を分析する。
2. 実践内容 以上を踏まえて、本研究ではA市内にある私立中学校・高等学校（中高一貫校）の生徒を対象にアンケート調査を行った。具体的には以下の通りにアンケート調査を実施した。まず、事前に当該校の校長宛に研究の目的・内容に関する文書と、実際に配布予定のアン

ケート用紙を郵送で送り、確認して頂いた上で調査の承認を得た。後日、当該校の教頭にアンケート調査を手渡しした。その後、教頭から各クラスの担任教師にアンケート用紙を渡してもらい、各担任教師がクラスでアンケート用紙を配布・回収した。その後、担任教師によって中学生・高校生から回収したアンケート用紙を教頭から受け取った。調査対象となったのは当該校の中学生 90 名と高校生 240 名である。また、中学生には保護者用のアンケート用紙を自宅に持ち帰ってもらい、各々の保護者に記入してもらった後、調査用紙を郵送で返送して頂いた。なお、保護者用のアンケートを返送して頂いた場合には、その保護者に対して、後日 500 円分の QUO カードを御礼として送ることを明記した。回収サンプル数は中学生 82 名、その保護者 51 名、高校生 168 名となった。なお、回答に要する時間は約 10～15 分であった。また、調査の実施時期は 2019 年 9 月中旬から 10 月上旬であった。さらに、倫理的配慮として、質問紙の表紙部分において、アンケートは匿名であり、回答は自由意志であること、個人の結果は明らかにされない点、気分が悪くなった際には中断してもよいことを明記した。

3. 結果

時間的展望に対する階層的要因の影響を分析するため、以下の変数を用いて分析を行った。まず、時間的展望に関する変数である。本研究では白井（1994, 1997）の時間的展望尺度（18 項目 5 件法）を用いた。これは「目標志向性」「希望」「現在の充実感」「過去受容」の 4 因子からなる（表 1）。

表 1 白井（1994, 1997）の時間的展望尺度

下位尺度	質問項目
目標志向性	私にはだいたいの将来計画がある
	私には将来の目標がある
	私の将来は漠然としていてつかみどころがない*
	将来のためを考えて今から準備していることがある
希望	10 年後、私はどうなっているのかよくわからない*
	私には未来がないような気がする*
	自分の将来は自分でできりひらく自信がある
	私の将来には希望がもてる
現在の充実感	将来のことはあまり考えたくない*
	毎日の生活が充実している
	毎日が同じことのくり返しで退屈だ*
	今の生活に満足している

	毎日がなんとなく過ぎていく*
	今の自分は本当の自分ではないような気がする*
過去受容	過去のことはあまり思い出したくない*
	私の過去はつらいことばかりだった*
	私は過去の出来事にこだわっている*
	私は自分の過去を受け入れることができる

*逆転項目

本尺度の得点が高いほど適応的な時間的展望を有していると定義する。ここでは各項目の得点の平均値を用いた。また、これらに加えて全ての項目の合計得点の平均値である「総合得点」も分析に用いた。「総合得点」が高いほど総体的に適応的な時間的展望を有していると解釈できる。

階層的要因としては父親の学歴、母親の学歴、家にある本の数を用いた。父親と母親の学歴については中学生および高校生に父親と母親の学歴をそれぞれ尋ね、「小学校または学校に行っていない」「中学校」「高等学校」「短期大学、高等専門学校（高専）、専門学校（専修学校専門課程）」の場合を 0、「大学」「大学院」の場合を 1 としたダミー変数を用いる。これらはそれぞれ「父親学歴」「母親学歴」とする。なお、「わからない」「お父さんはいない」「お母さんはいない」と回答した場合は欠損値扱いとした。本の数は「あなたの家にはおよそどのくらいの本がありますか。（ただし、一般の雑誌、新聞、教科書は数えません。）」という質問において「ほとんどない（0~10 冊）」「本棚 1 つ分（11~25 冊）」「本箱 1 つ分（26~100 冊）」「本箱 2 つ分（101~200 冊）」「本箱 3 つ分以上（200 冊より多い）」と回答した場合にそれぞれ 1~5 点を付与した「本の数」を用いる。「本の数」が高ければその家庭の所属階層が高いと解釈できる。

分析ではこれらの変数で欠損値のないサンプルを使用した。その結果、最終的なサンプル数は中学生が 52、高校生が 128 となった。記述統計量は表 2 の通りである。

表 2 記述統計量

変数名	最小値		平均値		最大値		標準偏差	
目標志向性	1.000	1.000	3.435	3.244	5.000	5.000	1.060	0.963
希望	1.500	1.000	3.317	3.279	5.000	5.000	0.963	0.832
現在の充実感	1.200	1.200	3.335	3.258	5.000	5.000	0.924	0.845
過去受容	1.500	1.000	3.250	3.395	5.000	5.000	0.916	0.864
総合得点	1.722	1.556	3.340	3.289	4.833	5.000	0.745	0.614
父親学歴	0.000	0.000	0.615	0.5781	1.000	1.000	0.491	0.496

母親学歴	0.000	0.000	0.500	0.352	1.000	1.000	0.505	0.479
本の数	1.000	1.000	3.365	2.562	5.000	5.000	1.253	1.169

左：中学生 右：高校生

特徴的なのは、中学生の家族の方が高校生の家族よりも平均的に所属階層が高いことである。本調査の対象は私立中学校・高等学校（中高一貫校）の生徒であるが、私立中学校に通う生徒の家族の方が私立高校に通う生徒の家族よりも所属階層が高いと言える。時間的展望については「過去受容」は高校生の方が高いが「目標志向性」「希望」「現在の充実感」「総合得点」については中学生の方が高い傾向にある。

表3は父母の学歴による時間的展望の平均値の違いを比較したものである。

表3 父母の学歴による時間的展望の違い

学年	時間的展望	大学・大学院卒 (父親)	非大学・大学院卒 (父親)	<i>t</i>	<i>p</i>
中学生	目標志向性	3.288	3.670	-1.338	0.188
	希望	3.320	3.313	0.029	0.977
	現在の充実感	3.288	3.410	-0.451	0.655
	過去受容	3.242	3.263	-0.076	0.940
	総合得点	3.285	3.428	-0.682	0.499
高校生	目標志向性	3.262	3.219	0.249	0.803
	希望	3.206	3.380	-1.163	0.247
	現在の充実感	3.238	3.285	-0.311	0.756
	過去受容	3.338	3.472	-0.853	0.396
	総合得点	3.260	3.329	-0.627	0.532

学年	時間的展望	大学・大学院卒 (母親)	非大学・大学院卒 (母親)	<i>t</i>	<i>p</i>
中学生	目標志向性	3.357	3.418	-0.230	0.819
	希望	3.286	3.407	-0.528	0.600
	現在の充実感	3.350	3.341	0.039	0.969
	過去受容	3.179	3.530	-1.509	0.137
	総合得点	3.300	3.430	-0.697	0.489
高校生	目標志向性	3.267	3.231	0.202	0.840
	希望	3.217	3.313	-0.662	0.509
	現在の充実感	3.293	3.239	0.364	0.716

過去受容	3.250	3.473	-1.410	0.162
総合得点	3.259	3.305	-0.435	0.664

ここでは「父親学歴」「母親学歴」によってそれぞれの時間的展望の平均値に有意な差があるのかを確認するために等分散を仮定しないt検定を行った。その結果、いずれの場合も有意な差はなく平均値の差も一貫した結果ではなかった。よって、親の学歴による時間的展望の差異は存在しないことが示唆された。さらに「本の数」とそれぞれの時間的展望との相関係数を確認した（表4）。

表4 本の数と時間的展望との相関係数

		<i>r</i>	<i>p</i>
中学生	目標志向性	0.104	0.361
	希望	0.040	0.724
	現在の充実感	0.017	0.879
	過去受容	-0.063	0.581
	総合得点	0.061	0.599
高校生	目標志向性	0.140	0.114
	希望	0.009	0.918
	現在の充実感	-0.038	0.670
	過去受容	-0.069	0.436
	総合得点	0.028	0.757

その結果、ここでも有意な相関関係はなくその符号も一貫した結果とはならなかった。よって、階層の高さの指標である家庭にある本の数によって中学生・高校生の時間的展望は変わらないことが示唆された。これらから、階層的要因の時間的展望に対する影響は確認されなかった。したがって、少なくとも本調査からは中学生・高校生の時間的展望に対する階層的要因の影響は存在しないと結論づけられる。

4. 今後の課題

今後の課題としては3点挙げられる。

1点目は、本研究の調査対象が私立中学校・高等学校（中高一貫校）の生徒に絞られている点である。このことから、本調査の結果を全国の中学生・高校生に一般化することには一定の留保が必要である。特に、中高一貫校を対象としていることから本調査の対象は比較的階層が高い家族の生徒が対象となっていることが予想される。したがって、階層的要因と時間的展望との間に関連が見られなかった背景には、選抜効果が働いている可能性

も考えられる。今後は、全国の中学生・高校生を対象としたデータで分析がなされる必要があるだろう。

2点目は本調査の対象が中学生・高校生に絞られているという点である。よって、例えば小学生にも本調査の結果がそのまま当てはまるとは限らない。特に、年齢が低い小学生の時間的展望は中学生や高校生の時間的展望よりも家庭の影響を強く受けていることが予想される。したがって、他の年齢の生徒を対象とした場合、階層的要因と時間的展望との間に有意な関連が確認されるかもしれない。今後は、より幅広い年齢層を対象とした調査を分析する必要があるだろう。

3点目は欠損値を持つサンプルの扱いである。ここでの分析では欠損値を1つでも有する変数があるサンプルは分析から除外した。すなわち、欠損値が完全にランダムに生じることを仮定している。しかし、必ずしもこの仮定が正しいとは限らないことは自明である。今後は、多重代入法等を利用した分析が行われる必要があるだろう。

参考文献

- Cottle, T. J., and Pleck, J. H., 1969, "Linear Estimations of Temporal Extension: The Effect of Age, Sex, and Social Class", *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment* 33.1: 81-93.
- Epel, E. S., Bandura, A., and Zimbardo, P. G., 1999, "Escaping Homelessness: The Influences of Self-Efficacy and Time Perspective on Coping with Homelessness", *Journal of Applied Social Psychology* 29.3: 575-596.
- Lewin, K., 1951, *Field theory in social science*. New York: Harper & Brothers. (=レヴィン, K. 猪股 佐登留(訳)(1979). 社会科学における場の理論(増補版)誠信書房).
- Nurmi, J. E., 1987, "Age, Sex, Social Class, and Quality of Family Interaction as Determinants of Adolescents' Future Orientation: A Developmental Task Interpretation", *Adolescence* 22.88: 977-991.
- O'Rand, A., and Ellis, R. A., 1974, "Social Class and Social Time Perspective", *Social Forces* 53: 53-62.
- 白井利明, 1994, 「時間的展望体験尺度の作成に関する研究」『心理学研究』65.1: 54-60.
- 白井利明, 1997, 『時間的展望の生涯発達心理学』勁草書房.
- Wallace, C.J., 1986, "Functional Assessment in Rehabilitation", *Schizophrenia Bulletin* 12.4: 604-630.